

## 第18回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン 世俗的オラトリオ《セメレ》全曲公演



池上直哉氏撮影

評

ヘンデル・フェスティバル・  
ジャパン「セメレ」

巧みで纖細 まさに歌の饗宴

ヘンデルのオペラやオラトリオを充実の演奏で紹介してきた「ヘンデル・フェスティバル・ジャパン」の第18回公演は

英語歌唱のオラトリオ「セメレ」。コロナ禍で延期されていた公演である（5月15日、東京・浜離宮朝日ホール）。

セメレ役の隱岐彩夏が抜群の力を發揮した。どこまでも伸びやかな声がホールに浸透する。エッジの利いたアグリタは曲が進むに連れて精彩を増し、終場近くの超絶技巧の長丁場を装飾豊かにうたいきるど、それまで静まりかえっていた客席が一気に沸いた。

テーベの王女セメレは神々の王ジュピターに愛されるが、正妻ジュノーの怒りを買う。神性を得たいセメレは、姉妹のアイノに姿を変えたジュノーの諭すまま、ジュピターに本来の姿で愛しに来るよう頼むが、その願いを受けて雷神の姿で現れたジュピターに焼き殺される。

恐ろしい話だが、愛と嫉妬と陰謀のうすまくバロック世界に、ヘンデルは独唱のみならず重唱や合唱を運動させた新しいスタイルで、さまざまな感情表現をもたらす音楽を創り上げた。その魅力をようやく日本の音楽家たちが十全に示せる時代になった。

ベテランの波多野睦美の活躍も忘れられない。陰険なジュノーと純真なアイノ両役をみごとに演じ、歌い分け、さらに前者が後者に化ける、衣の下の鎧的場面の狡猾さも巧みだ。

辻裕久、中嶋俊晴、広瀬奈緒らによるハイレベルの歌唱が続いた。バロックの歌の饗宴とはまさにこのことだ。

（長木誠司・音楽評論家）